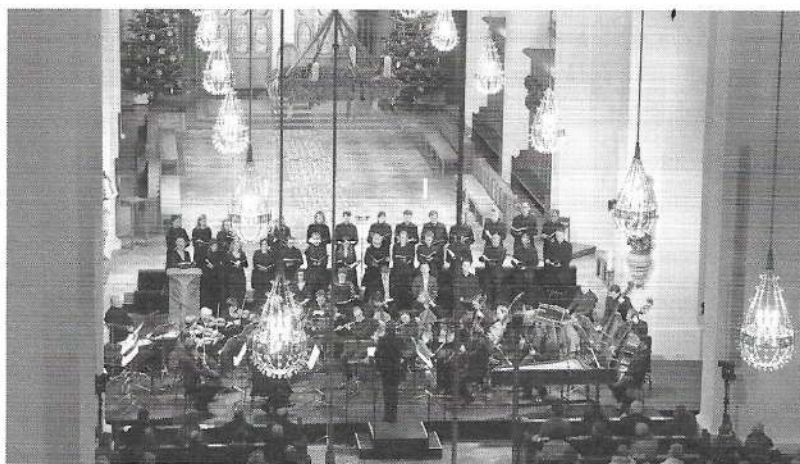


海外レポート

Worldwide classical music report

今月の注目公演



公演が行われた聖母教会はミュンヘンのシンボルでもある ©Wilfried Hösl



開場直後にはすでに上席はすべて埋まっていたという ©Wilfried Hösl



左からホロディスキ、ハッカー、
ホール、エロート、ベノワ
©Wilfried Hösl

バイエルン州立管、創立500周年の締めくくり

バイエルン州立管弦楽団が創立500周年を迎えた2023年、夏に大がかりなヨーロッパ・ツアーを決定した当楽団は12月21日、ミュンヘンの聖母教会で行われたチャリティコンサートで記念イヤーを締めくくった。

このチャリティはミュンヘンの貧困層に文化的体験を贈るプロジェクトで、開演20分前の開場直後にはすでに上席はすべて埋まっていた。

ウラディーミル・ユロフスキ音楽総監督の指揮は、J.S. バッハ《ロ短調ミサ》も豊満に鳴らし、残響の少ない環境で聴きたいと思わせられる意欲的な演奏だった。ソリストも粒ぞろいで、歌劇場専属オーケストラの強みを見せる。ソプラノ1のエルザ・ベノワは2017年の日本公演にも同行した若手で、教会の音響を最大限に利用して美しい声を聴かせた。ソプラノ2のタラ・エロートもベノワより前からバイエルン州立歌劇場アンサンブルで活躍し、今宵も温かい声を聴かせたが、アリアは始終落ち着いた発声で、低音は潰れたような声でようやく到達するなど、適役パートとはいえなかったのが残念だった。カウンターテナーのジェイムズ・ホールは、大人か子供か、男か女か、そういう次元を超越した特別な声を持ち、低音は苦戦したもの、歌い終わるころには非現実的な美しさを放っていた。テノールのジョナス・ハッカーは軽い、明るい声がよく伸び、ソプラノ1との二重唱の最後には秀逸な歌唱を聴かせた。バリトンのパヴェル・ホロディスキも健闘した。

この記念年の成果についてセルジュ・ドルニー総裁に質問すると、「われわれの歴史を作り上げたワーグナーとR. シュトラウスが中心のツアーも成功を収め、モーツァルトからリゲティまでの広いレパートリーに加え、ディーンやハース、細川俊夫等の世界初演でもわれわれの伝統を再認識できた。それは弟子たちに綿々と受け継がれた、音楽の鎖と人間的つながりなのです」と答えた。前日にJ. シュトラウス2世《こうもり》リハーサルも聴いたが、ユロフスキも楽団から伝統を学び、楽団もエネルギーを得られる相互関係で、501年目を以降もさらなる発展が期待できる。

(中 東生)